

祖堂集卷第一

第一毗婆尸仏、姓は拘樓、刹利王種なり。父の字は槃^ハ裊、母の字は槃頭末^ハ隨。所治の国は刹末提と名づく。偈に曰く、身は無相中より受生し、喩えば幻の諸の形像を出だが如し。幻人は心識本来空にして、罪福皆な空にして住する所無し。

第二尸棄^ハ仏、姓は拘樓、刹利王種なり。父の字は阿輪^ハ擊、母の字は婆羅訶提。所治の国は樓那和提と名づく。偈に曰く、諸善法を起すも本^ハと是れ幻、諸悪業を造るも亦た是れ幻。身は聚沫の如く心は風の如く、幻として出でて根無く実性無し。

第三毗舍浮^ハ仏、姓は拘樓、刹利王種なり。父の字は須波羅提和、母の字は耶舍越提。所治の国は阿耨曇摩と名づく。偈に曰く、仮りに四大を借りて以て身と為し、心は本と無生にして境に因りて有り。前境若し無くんば心も亦た無く、罪福は幻の如く起して亦た滅す。

第四拘留孫^ハ仏、姓は迦葉、婆羅門種なり。父の字は阿枝達兜、母の字は隨舍迦。所治の国は輪訶利提と名づく。偈に曰く、身は実無しと見るは是れ仏を見る、心は幻の如しと了するは是れ仏を了す。身心は本性空なりと了得せば、斯の人は仏と何ぞ殊別せん。

第五拘那含牟尼^ハ仏、姓は迦葉、婆羅門種なり。父の字は耶睽鉢多、母の字は鬱多羅。所治の国は差摩越提と名づく。偈に曰く、仏は身を見ずして是れ仏なりと知る、若し実に知る有らば別に仏無し。智者は能く罪性空なりと知り、坦然として生死を懼れず。

第六迦葉^ハ仏、姓は迦葉、婆羅門種なり。父の字は阿枝達耶婆、母の字は檀明越提耶。所治の国は波羅私と名づく。偈に曰く、一切

衆生は性清淨、本より無生にして滅す可き無し。即ち此の身心是れ幻生、幻化の中には罪福無し。

第七釈迦牟尼仏、姓は釈迦、刹利王種なり。父の字は閼頭檀、母の字は摩訶摩耶。所治の国は迦維羅衛と名づく。偈に曰く、幻化は無因亦た無生、皆な則ち自然に是くの如きを見る。諸法は化より生ずるに非ざるは無し、幻化は無生にして畏るる所無し。

是の釈迦仏なる者は即ち賢劫中の第四仏なり。三劫の中、初の千仏は花光仏を首と為し、下は毗舍浮仏に至るまで、過去の莊嚴劫中に於いて成仏することを得たり。中の千仏なる者は、拘樓孫仏を首と為し、下は樓至如来に至るまで、現在の賢劫中に於いて次第して成仏せり。後の千仏なる者は、光如来を首と為し、下は須弥相仏に至るまで、未來の星宿劫中に於いて当に成仏することを得べし。

賢劫初時、香水滌滿し、中に千莖の大蓮華有り。王は其の第四禪に此の瑞を觀見し、遽いに相い謂いて曰く、今此の世界若し成らば、當に一千の賢人有りて世に出現せん、と。是の故に此の時を名づけて賢劫と為すなり。因果經に准るに、云く、釈迦如来未だ成仏せざりし時、大菩薩と為り、名づけて善慧と曰う。亦た忍辱と名づく。功行已に満ちて位は補処に登り、兜率天に生れて名づけて聖善と曰い、亦た護明と曰う。諸天王の為に補処行を説き、亦た十方に於いて身を現じて説法せり。期運將に至りて当下に作仏せんとし、諸国土は何者か中に処るやと觀て、則ち知んぬ、迦毗羅国最も是れ地の中なることを。故に本起經に云く、仏の威神は至尊至重なれば、辺地の傾斜に生れざるなり。此の迦毗羅城は三千の日月乾坤の中央なり。往古の諸仏は皆な此に興れり、と。俱舍論に云く、剌浮洲の中なり、と。山海經に云く、身毒の国は軒轅氏之に居る、と。廓璞の註に曰く、則ち中天竺なり。彼の土は自ら五天竺国に分る。中天竺国は是れ天地の中なり。名既に辺に非ざれば、中の義現われたり、と。

因果經に云く、中天大夏の種姓に四有り、謂く、刹利帝種、婆羅門種、毗舍羅種、首陁種なり。刹利王種を最も高貴と為す。劫初より以來相承して絶えず。余の三姓は此の所論には非ず。但だ仏の姓を明らむれば、自ら分かれて五別あり、と。

又た長阿含經に云く、劫初成る時未だ日月光明有らず。諸天福尽きて下生し、皆な化して人と為り、歡喜を食と為し、身光遠く照

らし、飛行自在にして、男女尊卑親屬有ること無し。自然の地味、味は蘓蜜の如し。試みに当する者有り、遂に搏食を生ず。光威通じて亡び、呼嗟地に在り。食多ならば貌悴れ、食小ならば形沢い、便ち勝負を興し、地味は則ち没せり。又た地皮を生じ、地皮を食するに因るが故に諸惡湊集す。又た林藤粳米等の衆味の甘美なるを生ぜり。茲れに因りて食する者は男女の根を具せり。是くの如くして展転して便ち姻媾を為し、遂に胎生を始めたり。樓炭経に云く、自然の粳米は朝に刈りて暮に熟す、と。中阿含経に云く、米長ずること四寸にして人競いて預取す。是くの如く相煞して、預取するの処は後に更に生せず、と。

長阿含経に云く、尔の時衆生既に重ねて生ぜざるを見る、故に各おの憂惱を懐き、互いに田宅を封じ以て疆畔と為せり。其の自ら蔵すること有りてより以来、他の田穀を盗み、是れに由りて争い起り、能く決する者無し。議りて一人を立てて平等主と号し、善を賞し悪を罰せしめ、仍りて共に供給す。時に一人有り、容質瓌偉にして威嚴もて物を鞠し、衆の信伏する所なり。則ち往きて之に請えり。彼既に受け已つて、民の主の名有り。樓炭経に云く、衆人言議して長の号を為作し、之に謚して王と曰う。法を以て祖を取る、故に刹利と名づく。此には田地主と訳するなり。時に閻浮提は天下富樂にして安隱、地には青草を生ずること孔雀の毛の如し。八万の郡国は聚落相い聞く。寒熱及び病惱の者有ること無し。王は正法を以て世を治め、十善を奉行し、互いに相い崇敬すること猶お父子の如くす。人寿は極めて久しく量計す可からず。後に余王有りて正法を行わず、其の寿遂に減じて十千歳に至る。是くの如く漸減して今の百年に至れり。先に劫初に於いて創始して王と為り、展転相承するも、菩薩身に至りて羅睺羅の正嫡便ち絶えたり。余族の枝派は今も猶お位を嗣ぐ。故に下に広く転輪粟散紹続するの相を列するなり。初の民主王は号して大人と曰う。第二は珍宝王、乃至第三十三は善思王なり。上の如き第三十三王は子子相承するなり。亦た是れ粟散なるのみ。次下は並びに是れ転輪聖王にして、嫡嫡相承して菩薩に至る、と。

樓炭経に云く、眞闇王に一太子有り、波進迦と名づく。訳して大魚王と云う、と。仏本行経に云く、中天に城有り、名づけて褒多那と曰う。人民繁熾にして、其中に帝有り大魚王と名づく。此の王より乃ち大名稱王に至るまで子孫の相承する有り、苗裔計るに八万四千二百七十二王有り、尽く是れ金輪王なり。最後に二王有りて、閻浮提主と為り、荊草王と名づく。草王に太子有り、大荊草王

と名づく。大茆草王に子の王と為るもの無し。是の念を作して言く、我が上祖代代相承して皆な是れ金輪王の苗裔なり。我れ今嗣無し、種姓は將恐らく断絶せん。我れ若し出家せば恐らくは王種を断ぜん。若し出家せざれば則ち聖種を断ぜん、と。是れを思惟し已つて則ち国事を持して諸大臣に付し、王は乃ち山に入りて道を修め、五通仙と成り名づけて王仙と曰う。此の王仙先に夫人有り善襲と名づく。宮に在りて娠有り、後に一子を生めり。是れ大茆草王の苗裔なり。後に諸大臣は是れ王仙の太子なることを知り、遂に則ち重冊灌頂して王位を紹承せしめ、号して遮王と為す。又た鬱魔王と云う、亦た懿摩王と曰う。王に二妃有り。一は善賢と名づけ、二は妙端正と名づく。妙端正なる者は四太子を生めり。一には炬面と名づけ、二には金色と名づけ、三には象衆と名づけ、四には別成と名づく。善賢夫人は唯だ一子のみを生みて、名づけて長寿と曰う。端嚴なること喜ぶ可く、世間に双ぶもの少し。唯だ骨相無くして、位を紹ぐに堪えず。善賢思惟すらく、妙端正の四子炬面等輩は兄弟群族なり。我は今唯だ此の一子のみにして、端正なりと雖然も王と為るに堪えず。作何んが方便して、今我が此の子、王位を紹ぐことを得しめん。尔の時遮王、車を宮苑に駕して諸妃を安慰せり。善賢出で来たつて王に啓して曰く、我は種種に安隱なるも唯だ一願有り、王に従つて乞わんと擬す、願わくば王、我に賜わんことを。王曰く、心の欲する所に従つて、朕は当に之を与つべし。善賢曰く、王、変悔するを得ず。請う王、誓いを設けよ。王言く、若し変悔せば、朕は当に破して七分と作すべし。善賢は大王に白して曰く、炬面等の四子、宜しく擯出す可し。王言く、此の四子に過無し、云何んぞ擯出せん。王は良久して思惟すらく、自ら誓いを設ぐることを為し已れば、願いに違わじ、と。故に遂に四子を判して他方に擯せり。時に四王子は父王に白して言く、我等四人は余過を造らず、忽然として我を擯して国を出でしむるは何ぞや。王言く、汝四子実に過失無く、不幸にして横に遭つことを知れり。上に説く所の如きは我が心には非ず。善賢の意なり。時に四童子所生の庶母と并せて眷屬等は此の事を聞き已り、疾く王の所に至りて大王に白して言く、我等が四子、王の擯出することを奉ず、我れ願わくば隨い去らん。王言く、宜しく依るべし。遮王に勅有り、続けて四子に告ぐらく、若し姻娉せんと欲せば、他族を婚すること莫れ。宜しく内姓に親しみて種姓をして断絶せしむること無かれ、と。此の四童子は王の教勅を敬い、則ち眷屬を領して北に面して去り、舍夷林に至れり。其中は水土寛平にして、諸の坑阜無し。諸眷屬を將いて此の林中に住み、福德盛んなるが故に遂に巨国を成せ

り。後に遮王は群臣に問わんことを思えり、朕は昔し四子を擯出せしが、今は何方に在りや、と。大臣奏して曰く、今は香山の北、雪山の南に在り。二山の中間に林有り、名づけて舍夷と曰う。地は沃えて豊饒にして人民は熾盛なり。百姓之に帰すること猶お麩市の如し。鬱として大国を成し、冊立して王と為し、尼拘羅城と名づく。古仙迦毗羅得道の処にして、茲に因りて城の名を立てしなり、と。時に遮王問い己つて再三歎じて言く、我が子釈迦、我が子釈迦、と。此れに因りて徳に従つて姓を立て、釈迦と姓せり。釈迦なる者は訳して能仁と言ふなり。

大遮王の三子已に歿して唯だ別成のみ有り、号して尼拘羅王と曰う。是れ仏の祖祖なり。此の王に太子有り、名づけて拘盧羅王と曰う、是れ仏の高祖なり。此の王に太子有り、名づけて瞿拘盧王と曰う、是れ仏の曾祖なり。此の王に太子有り、名づけて師子頰王と曰う、是れ仏の祖なり。此の王に四太子有り、一には輪頭檀那と名づく、則ち淨飯王なり。二には輪拘盧檀那と名づく、則ち白飯王なり。三には途廬那と名づく、則ち斛飯王なり。四には阿弥都檀那と名づく、則ち甘露飯王なり。

淨飯王に二太子有り、一には悉達多と名づく、則ち是れ仏にして、四月八日に生れ、身長は丈六なり。二には難陀と名づく、則ち是れ逆風掃地の者にして四月九日に生れ、身長は丈五尺四寸なり。白飯王に二太子有り、一には調達と名づく、是れ仏の当兒にして四月七日に生れ、身長は丈五尺四寸なり。二には阿難と名づく、是れ仏の侍者にして四月十日に生れ、身長は丈五尺三寸なり。斛飯王に二太子有り、一には釈摩男と名づく、捉土成金の者にして四月十二日に生れ、身長は丈四寸なり。甘露飯王に二太子有り、一には波投と名づく、出家し竟る、四月十三日に生れ、身長は丈四寸なり。二には跋提子と名づく、八道にして、四月十四日に生れ、身長は丈四寸なり。

仏本行經に曰く、余の時護明菩薩は兜率天上に在りて、心に念じて一切衆生を化せんと欲す。遂に金團天子に勅すらく、汝善く諸の王の種族を観察し、則ち当に吾が為に一生処を揀ぶべし、と。金團天子は菩薩の勅を奉じて其の觀察を為せり。觀察すること已に竟つて、菩薩に白して言く、刹利種有り、姓は瞿曇氏、刹利帝の後なり。瞿曇大仙に依りて学道し、師に従つて瞿曇氏と姓せり。元本以来世世、金輪王の種族と為る。乃ち遮王の苗裔に至りてより以来、子孫は相い承けて、彼の迦毗羅城なる釈種の都する所に住め

り。其中に王有り、師子頰王と名づく。此の王に太子有り、輪頭檀那王と名づく。今此の王なる者は一切世間天人の中に於いて大名稱有り、菩薩託生の処と爲るに堪えたり、と。菩薩嘆じて曰く、善い哉、善い哉。汝は善く諸の王の種姓を觀察せり。汝の説く所の如く、我は定めて彼に生れん、と。又た經に云く、護明菩薩、降下せんと欲せし時、摩耶夫人は淨飯王に告げて言く、大王当に知るべし、我れ今、八禁清淨齋戒を受けんと欲す、と。齋戒に当り已つて遂に則ち眠れり。夢中に於いて一の六牙の白象を見たり。其の首は朱色にして、七支もて地を柱え、金を以て牙を裝い、天人の之に乗りて空よりして下り、淨飯王宮に赴むけり。

阿含經に拠るに曰く、仏の神を母胎に降すを推すに則ち此の土の姫周第五帝昭王即位二十三年癸丑の歲七月十五日に當りて、摩耶に託陰せり。二十四年甲寅の歲、摩耶夫人は毗羅苑中に於いて遊戲快樂し、波羅樹花の可愛なるを見て、右手を挙げて枝を攀じしとき、菩薩は右脇よりして誕生せり。身は眞金色にして相好具足せり、と。又た普曜經に云く、仏初生の時、大光明を放ちて十方界を照らし、地は金蓮を涌して自然に足を捧げたり。東西南北各おの行くこと七歩して四方を觀察し、一手は天を指し、一手は地を指して師子吼を作せり、天上天下、唯我独尊、と。又た偈に曰く、我れは胎に生るる分尽きて、是れ最後末の身なり。我れ已に解脱を得たれば、當に復た衆生を度すべし。此の偈を説き已るや、九竜の水を吐きて太子を沐浴するを感じたり。太子浴し已つて、嘿然として語らず。還た世間の嬰兒に同じ、と。又た周異記を案するに云く、昭王即位二十四年甲寅の歲四月八日、江河泉池忽然として泛漲し、宮殿人舍、山川大地咸な悉く震動せり。其の光五色有りて大微に貫入し、四方に遍ねし。昭王、大史蘓由に問うて曰く、是れ何の祥ぞや、と。蘓由奏して曰く、大聖人有り、西方に生まれたり、と。又た問う、天下に於いて如何ん、と。由曰く、則ち時に無きなり。他の一千年の外、声教は此の土に被せん、と。即ち是れ仏の西天竺三國迦毗羅城淨飯王宮に初生せしとき此の土に瑞応せるなり。十二因縁經を案するに云く、太子は年十九に登りて皇の后宫を厭えり。父王は出家せんことを恐畏し、遂に勅して籟韻もて太子を娛樂せしむ。太子は樂しまず、坐して三更に至る。五百の宮人悉く皆な睡ることを得たり。淨居天子、時に虚空中に在り、偈を説いて太子に告ぐらく、世間の不淨なる衆の惑迷は、婦人の身体性に過ぐるは無し。世間の衣服もて莊嚴するが故に、愚癡は是の辺に貪欲を生ず。是れ人は能く是くの如き觀を作す、如夢如幻にして眞実に非ずと。速やかに無明を捨てて放逸なること勿く、心に解脱を

得て功德身あり。又た天人の脰牖中に於いて叉手して太子に白して言く、時に去る可し、と。太子は此の偈を聞き已つて心に歡喜を生じ、潜かに車匿に命じて捷陟に鞭し來たらしめたり。四神の足を捧げて城の西北を踰えて去れり。太子念言すらく、夫れ出家者は大慈悲を具す。馬跡を留めずんば、王は必ず門人を罪せん、と。則ち城の西北の角に於いて一馬跡を留め、空に騰りて西北にして去りしことを知らしめたり。時に此の土の周の昭王四十二年壬申の歳二月八日の夜半に当れり。

律を案ずるに云く、太子は去り已つて、摩竭陁国の斑荼山中に至り、其の石上に於いて結跏趺坐し、是の念言を作さく、何物を以てか鬢髪をを剃除せん、と。纒かに此の念を起こすや、淨居天子便すまわち刀を捧げたり。太子は自ら把りて鬢髪を剃り已れり。淨居天子は更に纒僧伽黎衣を捧ぐ。便ち旧日著くる所の衣服を脱ぎ、并せて頭冠を脱ぎ、白馬等と車匿に付与して、將もちて王宮に還らしめたり。并せて偈言を説き、父王に辞して曰く、仮りに便ち恩愛もて久しく共に処るも、時至り命尽きなば会に別離すべし。此の無常にして須臾の間なるを見る、是の故に我れは今解脱を求む。余の時太子は山中に在りて、勇猛に精進して無上道を修したり。又た阿藍迦藍の処に詣り、三年、不用処定を学ぶも、非なるを知りて便ち捨てたり。復た鬱頭藍弗の処に至り、一年、非想非非想定を学ぶも、非なるを知りて亦た捨てたり。又た象頭山に至り、諸の外道と同じ日に麻麦を食ひ、六年を経て苦行將に満ちんとして則ち尼連河に於いて浴せり。苦行すること日久しく岸に就くこと稍難し。追成仙人挽きて樹枝を低くし、太子を接せり。

又た因果經に云く、浴し已つて我れ若し羸劣の身を以てして道を取らば、外道言わん、自ら餓ゆれば則ち是れ涅槃なりと、故に當に食を受くべし。太子纒かに此の念を起こすや、時に難陀と波羅奈との姉妹二人有りて、捧げて乳糜を上りたり。太子は又た自ら念言すらく、は當た何の器を將てしてか食を受くることを為さん、と。纒かに此の念を起こすや、時に四天王各おの石鉢を捧げたり。其の時、菩薩は平等の爲の故に並びに縋べて之を受け、貪欲を息むるが故に按じて一鉢と成し、以て乳糜を受け、喰いて色力を充たし、正覺山に詣らんと欲す。

本行經に准るに云く、太子思念すらく、當た何物をか用いて坐せん、応に淨草を須うべし、と。纒かに此の念を起こすや、路上に刈草人の名づけて吉安と曰うに遇えり。太子語りて曰く、此の草小許を惠施せらること可能なりや。愛惜を為さざるや、と。吉安則

ち授与せり。遷^ゆ進して去き、正覺山に至れり。太子は徳重きが為の故に、其の山震動し、山神出現して太子に語つて曰く、此は成道の処には非ず。太子問うて曰く、何方堪うるや。山神曰く、此れより摩竭提国の南一十六里に去りて、金剛座有り。賢劫の千仏は皆な此の座に昇りて等正覺を成ぜり。宜しく当に彼に往くべし。尙の時太子遂に則ち下山し、一盲竜に遇いたり。盲竜の太子に語つて曰く、菩薩は成道の処を求めんと欲するや。太子問う、汝は何ぞ我れの菩薩なることを知れるや。盲竜曰く、我れは昔し毗婆尸仏の時に於いて、悪性の比丘と為りて三宝を毀罵し、遂に竜中に墮し兼ねて其の目を盲いたり。過去に三仏出世して我が眼は則ち開けしも、滅後には還た閉じたり。今、汝の身を見るに我が眼をして開かしむ、故に汝は是れ菩薩なりと知れり。則ち太子を引きて金剛座に詣り、草を以て上に敷き、遂に此の座に昇らしむ。太子は弘願を發して言く、我れ若し無上菩提を成ぜずば、誓つて此の座より起たじ、と。而して正覺を成じ、之を号して仏と為す。故に普曜經に云く、菩薩は二月八日、明星の出する時に於いて大悟せり。便ち偈を造りて曰く、星に因りて悟りを得、悟りて後は星に非ず。物に隨わずして、是れ無情ならず。時に此の土の周の第六帝穆王三年癸未の歳二月八日に當りて成道せり。此れに因りて三十成道せり。

尙の時釈迦如来成道し竟つて、衆に示して曰く、夫れ出家沙門なる者は、欲を断ち愛を去り、自らの心源を識り、仏の本理に達し、無為法を悟り、内に得る所無く、外に求むる所無く、心は道に繫がれず、亦た業結せず。無念無作、非修非證、諸位を歷ずして而も自ら崇敬する、之を名づけて道と為す。

・四十二章經第二章。

一比丘有りて問う、如何なるか是れ清淨本性。仏言く、畢竟淨なるが故に。如何なるか是れ本性無知。仏言く、諸法は鈍なるが故に。

外道、仏に問う、有言を問わず、無言を問わず。仏乃ち良久す。外道、礼を作して讚して曰く、善い哉、善い哉。世尊は是くの如

き大慈大悲有りて、我が迷雲を開き、我れをして得入せしめたり。外道去りし後、阿難、仏に問う、外道は何の所證を以てして得入と言うや。仏言く、世間の良馬の如きは鞭影を見て而して行く。

・碧巖録六十五則参照。

是くの如く説法して世に住すること四十九年、後、拘尸那城なる熙連河側の娑羅双樹の間に於いて涅槃に入れり。寿齡は七十九に当れり。時に周の穆王五十二年壬申の歳二月十五日なり。暴風忽ち起こり、人舎を飄損し、樹木を傷折し、山河大地悉く皆な震動せり。西方に白虹の十二道有り、此の土を通過して連夜滅せず。此の時に當りて則ち仏の涅槃に入るの祥応なり。

又た涅槃經に云く、尔の時、世尊は涅槃せんと欲す。時に迦葉は衆会に在らず。仏は諸大弟子に告ぐらく、迦葉來たる時、正法を宣揚せしむ可し、と。又た云く、吾れに清淨法眼、涅槃妙心、実相無相、微妙の正法有り、汝に付囑す、汝善く護持せよ、と。并せて阿難に勅して二を嗣ぎて化を伝え、断絶せしむること無からしめたり。而して偈を説きて曰く、法は本と法として無法なり、無法も法として亦た法なり。今無法を付する時、法は何ぞ曾って法ならん。

・この伝法偈は伝心法要に引かれている。入矢義高『伝心法要・宛陵録』八七頁の和訳「法はもともとものとして無法なのであるが、無法もまたそのものとして法なのである。今この無法を君に授ける時、永遠なる法が嘗て法だったことがあろうか」。

余の時迦葉は五百の弟子と耆闍崛山に在り、身心寂然として三昧に入れり。正受中に於いて、倏然として心驚き、拳身戰慄せり。定中より出でて諸の山地を見るに、皆な大いに振動せり。則ち知りぬ、如来の已に涅槃に入れりしことを。諸弟子に告ぐらく、我が仏大師、涅槃に入り、七日を経て已に棺中に入れり。苦なる哉、苦なる哉。应当に疾く往きて如来の所に至るべし。恐らくは已に荼毗し、仏に見ゆることを得じ、と。仏を敬うを以ての故に敢えて空を飛びて如来の所に往かず。則ち弟子を將いて路を尋ねて疾く行けり。悲

哀もて速やかに往き、正に七日を満たして拘尸城の荼毗所に至れり。大衆に問うて言く、如何にせば大聖の金棺を開くことを得ん、と。大衆答えて曰く、仏、涅槃に入りて已に二七を経たり。恐らくは損壞有らん、如何んぞ開くことを得ん、と。迦葉言く、如来の身は金剛堅固、殞壞す可からず。徳香芬馥として栴檀山の若し、と。是の語を作し已るや、涕淚交も流れて仏の棺所に至れり。余の時如来は大悲平等、迦葉の爲の故に棺自然に開き、皆な則ち解散し、三十二相、八十種好、眞金紫磨堅固の身を現出せり。

余の時迦葉は復た重ねて悲哀し、諸弟子と仏を繞ること七匝し、長跪合掌して偈を説いて哀歎せり。曰く、苦なる哉苦なる哉大聖尊、我れは今荼毒苦切の心。世尊は滅度すること一に何ぞ速き、大悲は留まりて我れを待つ能わざりき。我れは堀山の禪定中に於いて、遍く觀るも如来は悉く見えぬ。又た觀るに仏の已に涅槃せしを見、倏然として心戦き大いに振驚せり。忽ち見る暗雲の世界に遍きを、復た觀る山地の大いに振動するを。則ち知りぬ如来の已に涅槃せしことを、故に我れは疾く來たるも已に見えず。世尊の大悲は我に普からず、我れをして仏の涅槃を見ざらしめたり。一言の相い教告するを蒙らず、今我れは孤露にして何の依る所ぞ。世尊よ我れは今大いに苦痛す、情乱れ迷悶す昏濁の心。我れは今為た世尊の頂に礼せんや、為復哀しみて如来の胸に礼せんや。為腹敬いて大聖の手に礼せんや、為復悲しみて如来の腰に礼せんや。為復敬いて如来の臍に礼せんや、為復深心もて仏足に礼せんや。何が故に仏の涅槃を見ざるや、唯だ願わくば我れに敬礼する處を示したまえ。如来の在世には衆安樂に、今は涅槃に入りて皆な大いに苦しむ。哀しい哉哀しい哉深大なる苦、大悲もて示教したまえ所礼の處を。余の時迦葉、是の偈を説き已るや、世尊は大悲もて則ち二足の千輻相あるを現わし、棺外に出だして迴らして迦葉に示すに、千輻輪より千の光明を放ち、遍く十方一切世界を照らせり。余の時迦葉と諸弟子とは仏足を見已つて、一時に千輻輪相を禮拜せり。大覺世尊の金剛の双足は還た自ら棺に入り、封閉すること故の如し。

余の時、如来は大悲の力を以て、心胸中より火の棺外に踊り、漸漸に荼毗し、千七日を経て妙香薪を焚きて、余して乃ち方めて尽きたり。仏力の威神もて内外の白襲にして損なわゆる無し。此れに二つの表わすこと有り。外の一重の白襲の損なわれざる者は、俗諦の存することを表わす。内の一重の白襲の損なわれざる者は、眞諦の壞せざることを表わす。

如来の涅槃に入りし壬申の歳より、今、唐の保大王子の歳に至るまで、一千九百一十二年を得たり。教の漢土に流してより、今壬

子の歳に迄ぶまで、凡そ八百八十六年を経たり。

第一祖大迦葉尊者、摩竭国の人なり。姓は婆羅門、父の名は飲沢、母の字は香志なり。瓶沙王と富を競いて、唯だ一犁を譲りしのみ。摩竭と共に以て饒かさを争い、更に千倍を逾ゆ。長者の貝玉を積みて、樹神に祈請す。貧女の金珠を獲て、塔像を莊嚴す。金光の子を載誕し、金色の妻を結成す。果たして前縁に合し、深く宿願に扶す。貴偶と為ると雖も乃ち欲情無く、出家を求めんと欲するに志を沢して聴許せらる。便ち世尊に投じて、弘誓の願を發せり。上法もて受戒し、清貞にして素を守る。愛無く欲無く、常に頭陀を行す。世尊在日、命じて坐せしめ衣を付せり。常に衆中に於いて第一と称歎せらる。

余の時大迦葉は諸比丘に告げて曰く、仏已に荼毗す、金剛の舍利は我等の事には非ず。何を以ての故ぞ。自ら国王大臣、長者居士の最勝の福田を求むる者有り、自ら当に供養すべし。我等は宜しく当に法宝を結集して断絶せしむること無からしめ、未來世の為に大照明と作して、正法を紹隆せしむべし、と。余の時迦葉は大神通を作し、須弥頂に行きて、而して偈を説きて曰く、如来の諸弟子、且らく般涅槃すること莫れ。若し神通を得し者は、当に結集に赴くべし。是の偈を説き已つて則ち搗銅を撃ち、搗銅の中に此の偈を伝え、声は三千大千世界に遍し。神通を得し者悉く皆な赴き集まりて聖衆既に繁し。遂に内は三蔵を開い、外は五明に達し、六通を足満し、智円かにして四弁ある者を揀ぶ。其の数四百九十有九なり。悉く王舍城の耆闍崛山の寶鉢羅窟、此に七葉巖と云うに集れり。

余の時阿難は、漏未だ尽きざるが為に、当に跋闍比丘に他心智有りて、則便ちすなわ觀察して、阿難兄は欲漏有るが故に未だ衆聖に及ばずして会に入ることを得ずと知らるることを被るべし。時に阿難比丘当に自ら念言すべし、我は如来に事えて亦た缺犯無きも、自ら漏有るが為に衆數に及ばず、と。是の事を思惟して曉夜経行し、明相出づる時身軀疲極し、兼臥するの次いで、頭未だ枕に至らざるに果位を得證して、心に歡喜を生ぜり。則ち寶鉢羅窟に往きて其の石門を撃てり。余の時迦葉は窟中に在り、問つ、是れ何人にして我が此の戸を敲くや、と。答えて言く、是れ仏の侍者なる比丘阿難なり、と。迦葉語けて曰く、汝は漏未だ尽きざれば、入り來たる

ことを得ず、と。阿難答えて言く、我れ已に無漏を證せり、と。迦葉報えて言く、汝既に無漏を證すれば神変を現じ、以て衆疑を遣る可し、と。尔の時阿難は則ち神通を馳せて鑰孔より入り、衆会に在ることを得て数を五百に添えたり。

育王経を案ずるに云く、迦葉は阿闍世王に告ぐらく、我れ今、如来の三蔵を集めんと欲す。願わくば大王、我が檀越と為れ、と。王言く、願わくば諸大聖、如来の三蔵を集めて遺余有ること無からしめよ。慈悲を捨てず、我が供養を受けよ、と。阿闍世は結集主と為れり。時に諸比丘は則ち座より起ちて、長老大迦葉に諮問せり、三蔵中に於いて先ず何蔵をか集めん、と。迦葉語けて云く、当に修多羅蔵を集むべし、と。迦葉は聖衆に白して言く、此の阿難比丘は多聞捨持にして大智慧有り。常に如来に隨つて梵行清淨なり。聞く所の仏法は、水を器に伝うるが如く遺余有ること無し。仏の讚歎する所にして聰慧第一なり。宜しく彼に請つて修多羅蔵を集めしむ可し、と。大衆は嘿然として之を允せり。迦葉は阿難に告げて曰く、汝は今者より宜しく法宝を宣ぶべし、と。阿難は躬から受けて敬諾し、聖心を觀察して偈を説いて曰く、比丘諸眷屬、仏を離れて莊嚴せず。猶お虚空中の衆星の月無きが如し。是の偈を説き已つて、衆聖の足を礼して則ち法座に昇れり。

七事記を案ずるに云く、尔の時阿難、座に昇り已るに當りて、緒の相好を尊くし、身を現わすこと仏の如し。衆は此の瑞を見て則ち三疑を生ぜり。一には謂く、大師は慈悲の故に涅槃より起ち、我等輩の為に甚深の法を宣ぶるや。二には謂く、他方の諸仏、我が釈迦の奄化せるを知るが故に而して此中^{こゝ}に來たりて妙法を宣揚するや。三には謂く、阿難轉身成仏して衆の為に説法するや、と。尔の時阿難にして是の言を説けり、是くの如く我れ聞けり、一時仏は某城の某処に住して某の經教を説く乃至人天等は礼を作して奉行せり、と。阿難則ち法座を下り、却つて本身に復れり。諸菩薩等は是れ世尊の加被なることを知り、衆疑は悉く遣れり。時に迦葉は諸比丘に問うらく、阿難の言つ所は錯謬せざるか、と。諸比丘皆な云く、世尊の説く所と異ならず、と。是に於いて迦葉は優波離に請つて毗尼蔵を集めしめ、次いで迦旃延に命じて阿毗曇蔵を集めしめたり。迦葉は則ち願智三昧に入り、集むる所の法蔵皆な欠少すること無く、茲れに因りて流布して断絶せざることを觀ぜり。

阿闍世王懺悔経に三種の阿難有り。一には阿難陀、此に慶喜と云つ。声聞法蔵を持し、上の二乗に於いて力に隨い分に隨う。二に

は阿難陀跋羅、此に慶喜賢と云う。中乘法蔵を持ち、上の大乘に於いて力に随い分に随い、下の小乗に於いて容与して兼ねて持せり。三には阿難陀婆伽羅と名づく、此に慶喜海と云う。菩薩の大乘法蔵を持ち、下の二乗に於いて容与して兼ねて持せり。又た台教中に四阿難有り。何等をか四と為す。一者は慶喜阿難にして蔵教を結集せり。二者は賢阿難にして通教を結集せり。三者は典蔵阿難にして別教を結集せり。四者は海阿難にして円教を結集せり。其の本を論するや、唯一の金竜尊仏なり。其の迹を語るや、四阿難なる弟子を分つ。梵語阿難は此には無染と翻す。阿なる者は無なり。難なる者は染なり。此の無染を論ずれば、亦た分かちて二と為す。一なる者は断除煩惱をば名づけて無染と為す。二なる者は出離修證をば名づけて無染と為す。断除煩惱の無染は是れ教を伝えし阿難に名づく。出離修證の無染は是れ禅を伝えし阿難に名づく。

阿難、師に問う、仏の金欄を伝えし外、別に今の什摩をか伝ふ。師、阿難と喚ぶ。阿難応諾す。師曰く、門前の刹竿を倒却著せよ。阿闍世王、師に請つて説法せしむ。師は請いを受けて昇座し、良久にして乃ち下れり。王、師に問う、何が故に弟子の為に説かざるや。師云く、大王は位崇く名重ければなり。

迦葉尊者、一乗を闡きて物を利し、二教を弘めて以て人を度す。実に他心を得て終に我想無し。説法住世するもの四十五年にして無量の衆を度せり。乃ち阿難に告げて言く、如来の正法眼、我れに付嘱せらる。我れは今年邁けり。仏の僧伽梨衣を持って鷄足山に入り、慈氏の下生あしやうするを待たん。汝は仏囑を受け、正法を弘揚して断絶せしむること勿れ。吾が偈を聴け、曰く、法法本来法、法無く非法無し。何ぞ一法中に於いて、法有り非法有らん。尔の時迦葉は是の偈を説き已つて、遂に王舎城に入り、阿闍世王に辞す。王は寢て遇わず。言を留めて門者に付し、王に奏して知らしめんとして云く、吾れ当に鷄足山に往くべしと。西域記よに准るに云く、此の山の三峯は鷄足を仰ぐが如し、故に此れに因りて号を立つと。迦葉尊者は此の山上に於いて、草を以て敷きて坐し、結跏し已つ

て、是の念言を作らすらく、今我が此の身は、仏の与えし所の糞掃の衣を著く、及び僧伽梨等を持す。五十七俱低六十百千歳を経て、慈氏仏出世す。其れをして朽壞せしめじ、と。是の念を作し已つて、遂に山に語けて曰く、若し阿闍世王と阿難と来たらば、山は當に為に開き、其れをして入ることを得しむべし。若し歸り去りし後は復た當に還た合すべし、と。言い訖つて便ち滅尽定に入れり。応時に大地は六種に震動せり。余の時阿闍世王は、睡夢中に於いて殿梁の折るるを見、遂に則ち驚覺せり。時に執局の使、王に奏聞して知らしめて云く、大迦葉、王に辞して鷄足山に往き、涅槃に入らんと欲す。遇ま王殿寢し、未だ敢えて奏聞せず、と。王は此の語を聞きて、悲しみを生じて泣きて云く、朕は何ぞ薄祐なる。諸聖涅槃するに覩見するを得ず。則ち竹園精舎に詣り、阿難の足を礼して迦葉の所在を借問し、遂に阿難に命じて同に鷄足に往けり。王の山に到り已るや、山は自ら開闢し、迦葉中に在りて全身散せず。王乃ち諸力士に勅して諸の香薪を積ましめ、之を闍維せんと欲す。阿難、大王に白して曰く、摩訶迦葉は定を以て身を持ち、弥勒の下生するを待ちて僧伽梨を捧付し竟つて方はめて涅槃に入る。如今は切に焚く可からざるなり、と。王は是の語を聞き、種種を以て供養し、心に悲恋を生ぜり。然る後、定身に礼辞し、却つて阿難に命じて王舎城に入らしめたり。阿闍世王と阿難と纔かに此の山を出づるや、山は合して故の如し。

師の入滅の時、此の土の周の第八主孝王五年丙辰の歳なり。淨修禪師讚して曰く、偉なる哉迦葉、密に仏心を伝う。身衣は一納、口海は千尋。威儀は庠序、化導は幽深。未だ慈氏に逢わざれば、且らく鷄岑に定す。

第二祖阿難尊舎、王舎城の人なり。姓は刹利帝、白飯王の子にして是れ仏の当弟なり。本と是れ金竜尊仏にして、今は如来の化する所と為り、法幢を建立して六万の衆を度す。高く仏日を懸け、大いに迷徒を照らす。博達惣持にして多聞第一なり。

師、巡遊して往きて一竹林の間に至るに、一比丘の錯つて仏の偈を念ずるを聞く、曰く、若し人生れて百歳にして、水の潦涸するを見ざるは、如かず生れて一日にして、而して之を覩見するを得たるには。阿難聞き已つて嗟歎して曰く、世間に一凡有り、諸仏の意を解せず。徒らに四圍陀を載するは、空身にして睡るに如かず。阿難歎じ已つて、比丘に語けて曰く、此れは仏語には非ず。如今

当に聴くべし、我れ仏の偈を演べん、曰く、若し人生れて百歳にして、諸仏の機を会せずんば、未だ若かず生れて一日にして、而して之を決了することを得たるには。具さに宝林伝に説く所の如きなり。

尠の時阿難、商那和修に告げて言く、如来の正法眼、我に付嘱せらる。我れ今汝に付す、汝当に吾が教を弘めて断絶せしむること無かるべし、と。復た末田底に謂いて曰く、仏預め汝を記せり、吾が滅度後、罽賓國中一百二十年に一比丘有り、末田底と名づけ、仏法を流せん、と。尠の時、商那和修と末田底とは同に阿難を師とし、末田底に弟子無く、商那和修に一弟子有り、優婆鞠多と名づく。西国羅漢の宗首なり。

尠の時阿難の付法偈に曰く、本来有法を付し、付し了って無法と言ふ。各各既に自ら悟れり、悟り了って無法無し。師は付法し已って身を虚空に踊らせ、十八変を作して風輪奮迅三昧に入り、身を分つて四分し、一分は忉利天に奉り、一分は沙渴羅竜王に奉り、一分は毗舍利王に奉り、一分は阿閼世王に奉れり。各々の宝塔を起てて供養せり。

阿難の入滅の時は此の土の周の第十主厲王十二年癸巳の歳なり。浄修禅師讚して曰く、多聞なる慶喜、高く法幢を建つ。仏の金偈を伝え、祖の銀釭を継ぐ。慈悲は第一にして、智慧は無双なり。飲光の後囑、月秋江に印す。

第三祖商那和修尊者、亦た商諾迦と名づく。是れ西天の自然九枝の秀草の名なり。摩突羅國の人なり。姓は毗舍多、父の名は林勝、母の字は嬌奢耶。母胎中に在ること六年にして始めて生れたり。尋いで後に出家するに、身衣自然に化して九條と成れり。慶喜の法を得て広く群生を度し、大いに明灯と作る。乃ち云く、仏記すらく、吾が滅度の後二百年中に、聖者の我れを継がん、と。則ち三昧に入りて觀見するに、吒利國中に長者子有り、名づけて善意と曰ふ。而して姓は首陀にして後に三子を生む。少なる者出家して当に我を續ぎて大いに吾が教を興さん。吾れ当に小神通を以て彼の國に至るべし。従衆を將いずして自ら之に往けり。長者は礼を作して問う、尊者遠く至る、何の須いる所か有る。答えて曰く、我に伴侶無く、子然として一身のみ。徒侶に命じて仏道に帰せしめんと欲

す。長者曰く、我れは世俗を樂しめば出家する能わず。若復子を生まば當に汝に給すべし。師云く、善い哉、善い哉。言已つて則ち本座に歸れり。時に長者は尋いで後に果たして三子を生めり。前の二子は出家を願わず。第三子は優婆毘多と名づけ、年は十七なり。尠の時和修は父に告げて曰く、仏の此の子を記して、吾が滅度後二百年中と云つは、第四師にして籌衆を度するに當れり、と。父は仏の記を聞きて則ち尊者に奉り、其の出家するに任せたり。

・籌衆 第四祖の章を見よ。

師乃ち毘多に問うて曰く、汝は年は幾歳ぞや。子曰く、年は十七歳なり。師曰く、汝は十七歳なり、性(原作姓)は十七歳なりや。子曰く、性は十七歳には非ず。子、師に白して曰く、為た心白きや、為た頭白きや。師曰く、此の白は是れ髮にして心頭には非ざるなり。子曰く、身は自ら十七歳にして、性(原作姓)は尠るには非ざるなり。

師の左右に在ること三四年間にして出家具戒し、便ち聖果を證したり。尠の時商那和修、毘多に告げて言く、如来は大法眼を以て迦葉に付嘱し、是くの如く展転して乃ち我れに至れり。我れは今汝に付嘱す、吾が偈を聽け、曰く、法に非ず亦た心に非ず、心も無く亦た法も無し。是の心法を説く時、是の法は心法に非ず。具さに宝林伝に説く所の如きなり。

自れ商那和修の滅度せし時は姫周の第十一主宣二十三年乙未の歳なり。淨修禪師の偈に曰く、胎衣尊者は、暗室の明灯なり。人天の耳目にして、仏法の股肱なり。心に非ず色に非ず、減らず増さず。良い哉至聖、覺海の大鵬なり。

第四祖優婆毘多尊者、吒利国の人にして其の姓は首隴なり。仏記すらく、禪祖中に於いて其の第四に當り、群品を化度すること、我が今日の如からん。賢劫の中に當に成仏することを得て、無相好如来と名づくべし、と。十七にして出家し、二十にして成道し、方に隨つて行化し、摩突羅国に至れり。大衆雲集す。半月説法に、天花時に降れり。地神腰現して法を聴くが故に、尽く解脱を獲たり。

具さに宝林伝に説く所の如きなり。

尠の時毘多尊者、凡そ一人を度すことに一籌を抛下す。籌は長さ四寸にして一石室を満たせり。室は高さ丈六にして縦横も亦た然

り。其の後度する者、名づけて提多迦と曰う。志し出家せんことを求む。師問うて曰く、は為た心出家するや、為た身出家するや。子曰く、我れ来たりて出家するは、身心の爲にして利益を求むるに非ず。師云く、身心の爲にせずして復た誰か出家する。子曰く、夫れ出家する者は無我の故なり。無我の故に心は生滅せず。心生滅せざるは則ち是れ常なるが故なり。既に是れ常なるが故に諸仏も亦た常なり。心に形相無く其の体も亦た介り。師云く、汝は当に大悟して心自ら明朗なるべし。仏法中に依りて恒沙の衆を度せん。介の時毬多尊者曰く、我れ今、此の法眼を將て汝に付嘱す。汝は流布して断絶せしむること無かるべし。汝今当に聴くべし、吾れ偈を説いて曰く、心は自ら本来心にして、本心は有法に非ず。有法に本心有らば、心に非ず本法に非ず。毬多尊者、法を付嘱し已つて即ち涅槃に入れり。介の時提多迦は、石室の簍を取り、之を積みて焚焼し、舍利を拾取し、塔を堅てて供養せり。

時に此の土の姫周第十三主平王三十一年庚子の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、優波毬多、弁は懸河に瀉ぐ。法山崢嶸、道樹婆娑。簍は石室に盈ち、屍は天魔を繋ぐ。性は十七に非ず、悟は剎那に在り。

・屍繫天魔 宝林伝卷二の伝参照。

第五祖提多迦尊者、摩迦陁国の人なり。舎に在りて父の夢るらく、金日の屋よりして出で、大光明を放ちて一宝山を照らすを。山頂に泉有り。初め香衆と名づくるも父の夢に因るが故に提多迦と号せり。訳して通眞量と云う。毬多云く、如来、汝を記すらく、吾が滅度後一百年中、必ず一子有りて道果を證せん、と。又た師の爲に其の父の夢を解くらく、宝山なる者は吾が身是れなり。光明を出だすなる者は汝が智慧なり。屋よりして出づる者は入道なり。山頂の泉なる者は無上の法味なり。提多迦は毬多の夢を解くを聞きて、心自ら忻慶し、而して偈を説いて曰く、巍巍たる七宝山、常に智慧の泉を出だす。廻りて眞法の味と爲り、能く諸の有縁を度す。毬多尊者、偈を以て答えて曰く、我が法は汝に伝う、当に大智慧を現すべし。金日の屋より出でて、天地を照曜す。介の時提多迦、毬多の偈を聞き已つて、合掌瞻顔す。既に付法を得て、諸土に遊歴し、而して群品を度せり。具さに宝林伝に説く所の如きなり。

介の時弥遮迦は八千仙中の主にして出家を求めんと欲す。介の時提多迦告げて曰く、汝、出家せんと欲せば、各おの心に自ら念ず

べし、刀を仮りて剃るに非ずして、念ずる所に隨うが故に鬢髪自ら淨せよ、深く仏を敬うが故に、衣は袈裟を生じて檀相に變れ、と。時に諸仙人は各自に仏を念じ、心に敬慕を生じたれば、鬢髪は自ら淨し、袈裟は体を生じ、心は不退転にして尽く聖果を獲たり。今の時提多迦、彌迦に告げて曰く、如来は正法眼を以て迦葉に付囑し、是くの如く展転して乃ち我れに至れり。我れ今、此の法眼を將て汝に付囑す。吾が偈を聴け、曰く、本法心に通達すれば、法無く非法無し。悟り了れば末悟に同じく、無心にして無法を得。師は偈を説き已つて化火三昧し、而して其の体を燼せり。弟子彌迦は舍利を收得し、斑荼山中に塔を起てて供養せり。

時に此の土の姫周第十五主莊王七年己丑の歳に當れり。淨修禪師讚して曰く、多迦大師、無我にして出家す。根を了し境に達し、空花を免却す。体は形相には非ず、理は齒牙を出づ。方に隨つて物を利す、豈に匏瓜なること有らんや。

第六祖彌迦尊者、中印度の人にして提多迦の法を得たり。

具さに伝中の如し。

今の時彌迦、法を得已つて遊歴行化せり。衆中に一人有り、

波須密と名づけ出家を求めんと欲す。今の時提多迦尊者曰く、仏は在世時に北天竺に至り、而して阿難に謂いて曰く、此の国土中に、吾が滅度後三百の末に一聖者有りて、當に世に出づべし。姓は波羅墮、名は婆須密にして諸祖中に於いて其の第七に當る、と。仏の汝を記すは我が所知には非ず。汝、出家して觸器を捨除す可し、合に聖果を證すべけん、と。時に婆須密は其の酒器を棄て、合掌作礼して深く自ら覺知すらく、我れ昔し曾つて無量劫中に於いてして宝座を第七仏に施せり。仏は我が与に授記すらく、賢劫中に於いて當に作仏することを得べし、禪祖中に於いて當に第七を得べし、と。尊の説く所の如く、深く昔縁に達し、寤めて觀る所の如し。尊者は大慈あり、願わくば我れを接引せよ、と。時に彌迦は則ち出家と為り、而して仏戒を受け、所作已に弁じて深く自ら之を知れり。乃ち命じて付法し、而して偈を説いて言く、無心にして可得無ければ、無名の法を得たりと説く。若し心と非心とを了すれば、始めて心心の法を解す。師、滅度に入る。

時に此の土の姫周第十八主襄王十七年丙申の歳に當れり。淨修禪師讚して曰く、彌迦祖は、五通を習いし仙。師の法の正しきに遇い、我が心の偏れるを省す。如来の悟りを悟るに、玄の又た玄。神通もて示滅し、八部潛然たり。

第七祖婆須密尊者、北天竺國の人なり。弥遮迦の法を得已つて而して自ら行化し、諸の有情を度せり。迦摩羅國に至りて大いに仏事を作すに、此の座前に於いて大智者有りて仏陀難提と稱す。師に問うて曰く、解く論議するや。師曰く、論ずれば則ち義ならず、義なれば則ち論ぜず。若し論義せんと擬せば終に論議するには非ず。仏陀難提は師の論義を聞いて、心は則ち敬伏して出家せんことを求む。師則ち納受し、具戒證果せり。乃ち命じて付法し、而して偈を説いて曰く、心は虚空界に同じく、虚空に等しき法を示す。虚空を證得する時、是無く非法無し。具さに伝中の如し。

自れ波須密の入定せし時は、此の土の姫周第二十一王定王十九年辛未の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、祖の婆須密は、弥遮の室に入る。迷悟は本と如、物我は冥一。手には酒器を携え、頂には仏日を撃く。奚んぞ是にして奚んぞ非ならん、誰か得して誰か失せん。

第八祖仏陀難提尊者、迦摩羅國の人にして姓は瞿曇波なり。当生の時、頂上に珠有りて珠光照曜せり。年四十に至りて婆須密に遇い而して出家することを得たり。便ち聖果を證し、遊行して化導す。提迦國に至りて一人有り、伏駄密多と名づく。而して師に問うて曰く、父母は我が親に非ず、誰か最も親なる者と為す。諸仏は我が道に非ず、誰か最も道なる者と為す。師曰く、汝が言は心と親にして、父母は比す可きに非ず。汝が行は道と合す、諸仏の心即ち是なり。外に有相の仏を求めば、法と相似せず。若し汝が本心を識らば、合するに非ず亦た離するに非ず。余の時伏駄密多、尊者の是の妙法を説くを聞くことを得て、則ち五体投地し、深く敬いて礼を作せり。余の時尊者は則ち出家を与え、而して賢聖に命じて具足戒を受けしめたり。余の時仏陀難提、伏駄密多に告げて曰く、如来は大法眼を以て迦葉に付嘱し、是くの如く展転して吾れは第八に当れり。汝は法宝を受けて断絶せむること勿れ。吾が偈を聴け、言く、虚空に内外無し、心法も亦た是くの如し。若し虚空を了するが故、是れ眞如の理に達す。具さに伝中の如し。

師の入滅せし時は、此の土の姫周第二十四主景王十二年丙寅の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、仏陀難提、大いに群迷を化す。心

に内外無く、法は高低を離る。五天の論將、三界の雲梯。卓然たり眞氣、南北東西に。

第九祖伏駄密多尊者、提迦国の人にして姓は毗舍羅なり。

具さに伝申
の如し。

仏陀難提の法を得已つて、中印国に至りて大いに仏事を作り、群

品を導化して百千人と俱なり。一長者有り、名づけて香蓋と曰つ。家に一子有り、難生と号し、師に依りて出家せり。余の時師既に受け已つて、勤苦して修行し、脇席に至らず。茲れに因りて号を立て脇尊者と名づけたり。余の時伏駄密多、比丘難生に告げて曰く、如來は大法眼を以て迦葉に付嘱し、展転相伝して今に我に至れり。我れ此の法を將て汝に付嘱す。汝は善く護持して断絶せしむること無かれ。汝は吾が教を受く、而して偈を聴け、曰く、眞理は本と無名なるも、名に因りて眞理を現わす。眞実法を領得すれば、眞に非ず亦た偽に非ず。師は偈を説き已つて嘿然として入定せり。諸天散花して之を供養せり。時に脇尊者は則ち香薪を以て、用て之を闡維し、舍利を收得して塔を建てて供養せり。

時に此の土の姫周第二十六主敬王三十五年甲寅の歳なり。淨修禪師讚して曰く、伏駄密多、大器は晩成す。五十にして語らず、五十にして行ぜず。俄かに大士に逢い、倏ち無生に契つ。崖松に操有り、鶯鶯に程無し。

第十祖脇尊者、中印国の人なり。伏駄密多の法を得て、広く群迷を化し、花氏国に至るに一長者有り、名づけて宝身と曰いて七子有り。第七子を富那耶奢と名づく。師を礼して白して言く、我れ今、出家せんと欲す。尊者当に濟度すべし、と。余の時尊者は則ち出家と爲し、具戒し證果す。乃ち命じて付法し、而して偈を説いて曰く、眞体は自然に眞にして、眞に因りて理有りと言く。眞眞の法を領得すれば、行無く亦た止も無し。師は付法し已つて化火三昧し、而して自ら焚身せり。耶奢尊者は舍利を收拾し、塔を豎てて供養せり。

時に此の土の姫周第二十八主貞王二十二年癸亥の歳に當れり。淨修禪師讚して曰く、脇大尊者、愛憎の網捨く。量は虚空に等しく、道は唯だ蕭灑。眞体は自然にして、眞に因りて舒写す。世に約せば蒼蒼として、意馬を奔騰す。

第十一祖富那耶奢尊者、花氏国の人なり。姓は瞿曇、兄弟七人にして最も幼きに処る。心明らかに博達し、諸の求むる所無し。付法を得已つて広宣流布し、次第に遊化す。又た一城の波羅奈と名づくるに至り、一長者の馬鳴と名づくるに遇えり。師に問うて曰く、我れ仏を識らんと欲す、何者か即ち是なる。師曰く、汝、仏を識らんと欲せば、識らざる者はなり。馬鳴曰く、仏既に識らざれば、争でか是なりと知らんや。師曰く、汝既に識らず、争でか是ならずと知らんや。馬鳴曰く、此は是れ鋸の義なり。師曰く、彼は是れ木の義なり。師却つて問う、鋸の義なる者は何ぞ。馬鳴曰く、師と共に並びて出づ。馬鳴却つて問う、云何が木の義なる。師曰く、汝は我の解くことを被れり。余の時馬鳴は師の勝義を聞き、心即ち歡喜して出家を求めたり。具さに伝中
の如し。余の時富那耶奢、馬鳴に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て汝に付囑す。汝は流布して断絶せしむること勿かる可し、と。而して偈を説きて曰く、迷悟は隱顯の如く、明暗は相い離れず。今隱顯の法を付す、一にも非ず亦た二にも非ず。時に馬鳴は師の偈を説くを聞きて、心大いに慶悦す。師は付法し已つて則ち神通を現わして飛行自在、却つて本座に至りて寂定に入れり。

時に此の土の姫周の第三十三主安王十四年戊戌の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、富那夜師、智は須弥の若し。心は去住を捐て、身は榮衰を外にす。明暗隱顯、視聽するに希夷たるに、現前に提取して、更に参差する莫し。

第十二祖馬鳴尊者、波羅国の人なり。具さに本伝
の如し。余の時馬鳴、毗羅に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て汝に付囑す。汝は流布して断絶せしむること無かる可し。而して偈を聴け、曰く、隱顯するは即ち本法、明暗は元より貳無し。今付す悟了の法、取にも非ず亦た棄にも非ず。師は大寂に入れり。

時に此の土の姫周の三十五帝顯王二十七年甲午の歳なり。淨修禪師讚して曰く、尊者馬鳴、花氏城を化す。魔宮に霧卷き、釈苑に風清し。我れ仏を識らんと欲せば、識らざる者明らむ。玄解に非ざるは莫く、足を動かせば塵生ず。

第十三祖毗羅尊者、花氏国の人なり。

具さに本伝の如し。

余の時毗羅、竜樹に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て、用て汝に付す。汝は当に護持して断絶せしむること勿れ。而して偈を聴け、言く、隱に非ず顯法に非ず、是れ眞實際なりと説く。此の隱顯の法を悟れば、愚にも非ず亦た智にも非ず。毗羅入滅す。

時に此の土の姫周三十七帝熾王四十一年壬辰の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、毗羅大聖、因地の魔王。師の指教に憑りて、豁として眞常を證す。胡ぞ愚智と為さん、詎ぞ是にして詎ぞ長ならん。徳馨蘭慧、性は氷霜よりも淨し。

第十四祖竜樹尊者、西天竺の人なり。

具さに伝中の如し。

余の時竜樹、提婆に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て用て汝に付す。汝は当に教を受くべし。吾が偈を聴け、曰く、隱顯の法を明らめんが為に、方に解脱の理を説く。法に於いて心に證せざれば、嗔も無く亦た喜も無し。竜樹尊者、寂然として入定す。

時に此の土の秦の第二帝始皇三十五年己午原作五の歳なり。淨修禪師讚して曰く、菩薩竜樹、竜を化する是れ務め。心に仏心を曉り、住して而も住するに非ず。身に円月を顕わし、法は膏雨を流す。提婆は機に投じ、就いて旨趣を諳んず。

第十五祖迦那提婆尊者、南印度の人にして姓は毗舍羅なり。

具さに伝中の如し。

余の時提婆尊者、羅睺羅多に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て用て汝に付す。汝は宜しく伝受して断絶せしむること無かるべし。而して偈を聴け、言く、本と伝法人に対して、為に解脱の理を説く。法に於いて実に無證ならば、終りも無く復た始めも無し。

此の師の滅度の時は、此の土の前漢第四主文帝十九年庚辰の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、迦那提婆、徳岸弥よ高し。香象を迴旋し、金毛を吹欸す。機は巖電よりも迅く、弁は秋濤に瀉ぐ。始終證を絶し、王刀を悞つ勿し。

・勿悞王刀 悞は誤に同じ。先業の報いとして悪王に殺害されたことを言う。

第十六祖羅睺羅尊者、毗羅國の人にして姓は梵摩なり。父の名は淨徳具さに伝中
の如し。 尔の時僧伽難提にして師に問うて曰く、法に證有
りや、取捨有りや、有無有りや、内外有りや。尊者願わくば慈造して為に解説せよ。尔の時羅睺羅多、偈を以て答えて曰く、法に於
いては實に無證、取せず亦た離せず。法は有無の相に非ず、内外云何にしてか起らん。

此の師全身入定せし時は、此の土の前漢第六武帝十年戊辰の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、羅睺の道德、口に在りては寧ろ論
ぜん。師の耳くまひらを説くに困りて、尋いで入門するを得たり。高く日月を提げ、大いに乾坤を照らす。取せず捨せず、子孫に伝う。

祖堂集卷第一

